

親鸞仏教センター通信

2006.
September

2006年9月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第19号

ある医師の一言

親鸞仏教センター研究員 嵩 海 史

学習会の席上、参加者の一人であるホスピス医師が発した一言が、いまでも私の心に深く刻まれている。ちょうど、「他者」という言葉が話し合いのなかで頻繁にもち出されたときのことである。他者は、哲学でも問題にされている言葉であるし、仏教界でもしばしば話題にされる言葉である。異なった学問領域にまたがって、同じ言葉が使用されているのだから、当然のことながら多義性をおび、意見がすれ違う。他者という言葉のもつ一人ひとりのイメージや定義がぶつかり合いながら、一定の意味へと収束されていった。

そのホスピス医師は、「そもそも仏教には、他者という発想はあるのだろうか」と発言した。それに対して、初期仏教を勉強されている参加者の一人は、「自身の修行を目的とするのだから、他者という考えはないような気がする」と意見を述べる。私自身はそれに同調しつつも、阿弥陀如来を他者と見る研究者もいるという説や、大乘仏教には「自利利他」と言われて、皆で「さとり」を得るといった意味での他者という考え方もあるという内容のことを発言した。

するとその医師は、「私の思っている他者というのは、絶対他者とも言うべきか。末期のがん患者の方々が、死を受容していくプロセスとして、アメリカの医師、キューブラー・ロスの説が広く知られているけれど、あの説の取引の相手というのか、そういうのはキリスト教の考え方のうえに成り立っている発想ではないか。日本人には、日本人の信仰がある気がしてならない」と語った。

学習会だけに、話題は一つに留まらず、しばらくして別の話に移ってしまった。だが、私はずっとその医師の発言をひきずっている。それは、死が数値化されつつ、眼前に迫ってくる人々と常に接し、生と死を考えて来られたその医師が、仏教に期待を寄せていると感じたからである。さらにその言葉から、^{わら}も ^{つか}も 掴む心境、^{ひたん}悲歎に くれる心境、^{うら}恨みの心境など、数値化されないさまざまな感情の交錯する情況が目に見えてくる。「死に直面した状況下で仏教はどう力になれるのか（つまり、仏教と医療の関係）」「日本人の民間信仰と仏教教義で語る死生観の関係」「アメリカの仏教系ホスピスの現状とその導入について」「仏教における他者論」など、たくさん問題を孕んでいるように思われるのである。

これらの問題については、すでに言及されていることでもある。と言っても、解決したということではない。時間をかけて、いろいろな方途を考え、地道に取り組むべき課題ではないかと強く思っている。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土——^{じよく}濁世を超えて、^せ濁世に立つ——」

本願のはたらき

——念々に変わりながら、いまを生きる——

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第47回から第49回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。3回にわたって、『浄土論』の「菩薩莊嚴功德成就」の第三句と第四句について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、第46回からその一部を紹介する。（越部良一）

■ 万劫の初事

『浄土論』の菩薩莊嚴功德の第二は、「無垢^{むく}莊嚴^{しょうこん}の光、一念および一時に、普く諸仏の会を照らし、もろもろの群生^{ぐんじやう}を利益す」（『真宗聖典』137頁、東本願寺出版部。以下、『聖典』と略称）と言います。「一念および一時」、一つの時。二つの時にまたがらない。いまこっちにいて、次の時にあっちに行くというのではなくて、一つの時に、あらゆる世界を照らす。そして「もろもろの群生を利益す」と。ここに曇鸞は丁寧な注釈をつけています。この前の句では、「不動にして至る」（『聖典』289頁）、動かずしてはたらくと、こう言った。けれども、時が違うかもしれない。動かなくても前後があるのだらうと。だから、今度は「一念および一時」、前もない後もないこの一瞬、こういうふうに押さえ直したのだと注釈しております。これは、仏教の時間の問題と絡んで、大変大事な問題だと思えます。

曾我量深先生が96歳で亡くなられて、もう35年にもなるのですが、90歳のころ、正月、お祝いに来た方に、「先生、おいくつになられましたか」と聞かれて、「ああ、今年で90だ」と。

「それはおめでとうございます」と言ったら、「万劫^{まんこう}の初事であります」とおっしゃったと。「劫^{こう}」というのは、羽衣劫^{はごろも}とか、恒沙劫^{こうじや}とかの劫です。羽衣劫というのは、一辺四十里の岩を三年に一度、天女が舞い降りて羽衣で撫で、その岩がすり減って無くなるまでの時間をさします。何時になったらすり減るのやら。大体、岩など、いくらすっても、手ぐらいでは減りませんよ。だから、羽衣ですり減って無くなる時間というのですから、気の遠くなるような時間、それが「一劫」です。恒沙劫というのは、ガンジス河の砂の数、それを数えるなどという人はいないのでしょうけれど、その砂の数を数え終わるまでの時間。そういうのが一劫で、その一万倍が「万劫」です。「万劫の初事です」と、こうおっしゃった。それは、90歳になったから珍しいというのではないのです。生きている一時ひとときが、本当は、万劫の初事なのです。

初めてここに一瞬がある。念々に初めて一瞬がある。われわれはそう思わないのです。昨日があつて明日もある、と思っているのです。いまの時が、もう二度とない、この一瞬が全世界と匹敵する重みだなどと思わないでしょう。明日になったらどうだとか、昨日どうしたとか、そんなことばかり考えていますから。けれども、仏法に出遇^{であ}うということは万劫の初事と、いまの時を感ずるのだと。そう言うのです。そういう内容なのです。この「無垢莊嚴の光、一念および一時に」というのは。

■ 信の一念

親鸞聖人も「一念」ということを非常に大事にされます。「行の一念」と「信の一念」ということを言われて、行の一念は南無阿弥陀仏、その一念。南無阿弥陀仏というその行は、本願がわれにはたらく、その相です。そこに、信の一念ということを加えた。南無阿弥陀仏が本願のはたらきであると信ずる。その信心自身も如来のはたらきである。それは一念だと。一念は一というけれど、二ある一ではない。だから、一念というのは、「信樂開発の時剋の極促」（『聖典』239頁）だと。時を截るような時だと。これも言ってみようがないのです、そういう時のことは。

われわれが感じている時間は、チクタクチクタク、今日もあって明日もあってという時間です。ところが、そうではない。もう二度と繰り返すことができない、二度と返ることができない、そういう時を、一時、一時、無量なる内容を孕んだ一時を、いま生きる。こんなことは、われわれには、なかなか起こらないけれど、本願の、南無阿弥陀仏においていただく時というのは、そういう時なのだと。それが「信の一念」だと。こうおっしゃるのです。

それは比喩的に言えば、念々に断崖絶壁の一点に立っているようなものです。われわれは、念々にその一点に立っているなどという危機感を抱かずに生きているのですけれど、でも、質的には、前の一念に死んで、次の一念に蘇る。念々に変わりながら、いまを生きている。われわれは、何年生きててもそういう重い一念を感じることがない、情けない凡夫ですけれど、でも、本願に出遇う一念は、そういう質のものなのだと。そういう一念に出遇うと、万劫の初事ですと。そういう時に出遇うということは、いつかどうなるという話ではないのです。いまが無上の時であると、本当に拝める。そういう時が、この「一念および一時」である。

「いま」という言葉を言った途端に、過去になってしまうわけですから、いまというのは、つかまえようとしたらいいわけでは。つかまえ

ることができないのです、一念は。だから、つかまえられるような時を、破ったような時と言ってもよい。そういう時に出遇わしめるはたらきが、本願のはたらきであり、そういう時に出遇うなら、そこに「普く諸仏の会を照らし」、あらゆる諸仏の会座にいつてはたらくことができる。普くいけると同時に、一念でいけると。われわれはどちらにもいけないで、動けないで、にっちもさっちもいかないで、ずるずると長い時間を生きながらどうにもならない。それをひっくり返すような語り方なのではないかと思います。

われわれには、動かずしてはたらくとか、一念ではたらくとか、そういうことは何のことやらわからない。でも、本願のはたらきを受けるということは、そういうことなのだと。いわゆる世間の、われわれの世間生活で感じている時間空間、あっちもこっちもあると感ずるような空間、前もあり後もあるというような時間、そういう時間空間を破って、本願のいのちを感じた時の、新しい空間と新しい時間というものの意味を呼びかけてくる。そういうことが、教えの言葉の内容として暗示的に語られていることなのではないかと、私は、そのようにいただいております。（文責：親鸞仏教センター）



「親鸞思想の解明」のご案内

どなたでも聴講（無料）いただけます。なお、10月31日は、清水 博氏（東京大学名誉教授、「場の研究所」所長）をお招きし、「救済の生命場を求めて—科学と宗教の出会い—」と題したシンポジウムを開催します。

記

日時：2006年 9月 休 会
 10月31日（火）午後5時30分～9時
 11月17日（金）午後6時30分～9時
 場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
 JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

現代と親鸞の研究会・第20回

本当の教育とは何か

東京大学大学院教授 佐藤 学



佐藤 学氏

2005年9月27日、東京ガーデンパレス（文京区）において、教育学者の佐藤学氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。佐藤氏は、新自由主義とグローバル化時代のなかでのさまざまな教育の問題を説明されながら、これからの教育のあり方について提言された。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ 新自由主義とグローバル化時代の危機

1980年以降、中学校で校内暴力が一挙に広まり、日本の教育の深刻な危機の出発点になりました。急速な近代化がピークに達すると、学校は成功を生む場ではなく、むしろ挫折、失敗の場になっていきます。それまでは、世界一勤勉な子どもたちであり、世界一学校が信頼され、教師も尊敬されていました。本来は、この転換点で新しい社会に対応するために、教育の目的、理念、制度などを根本的に解決する必要があったわけですが、この転換が図られないままに今日まで来たということです。そのなかで一番深刻なのは、「学びからの逃走」です。子どもたちは学校に行く目的とか、教育の目的や意味を見いだせなくなっています。

現代の危機という問題の一番の根幹は、おそらく「新自由主義」の浸透にあると思います。これに拍車をかけたのがグローバリゼーションであったと思います。世界全体が、新しい教育と社会の状況を迎えるに至りました。これを「グローバル化時代」と呼びます。

グローバル化は、労働人口と労働市場を大きく変化させました。産業主義からポスト産業主義への移行におけるこの10年間に、若年労働市場の9割が消え、従来の労働市場が崩壊しました。ポスト産業主義社会は、高度な知識をもつ人材を必要としているからです。同時に、雇用形態も変化しました。現在、フリーターが増えています。若年層が低賃金のなかにどんどん組み込まれ、安定した社会参加ができない状態に放置されています。また、学齢児童の5人に1人が貧困層であり、日本の近代家族の崩壊も急速に進んでいます。親が責任をもって教育するというのは、近代家族が生み出した規範であり、システムだったのですが、これが解体してきています。

■ 新自由主義が生み出した不信

教育の危機は、教師不信とか学校不信に一番端的に表れています。新自由主義の考え方では、教育はサービスです。サービスの提供者に対して消費者という構図が、教師と親との関係なのです。保護者がサービスの受け手になれば、当然、文句を言います。文句を言うと、今度は学校側が教師に保護者の文句を託さざるを得ないという悪循環になります。結局、市場原理がもたらすサービスの関係というのは信頼を切り、お互いを不信と防衛のなかに置いていくのです。本来、責任で行わなければならない教育を、サービスに転換することによって起こる人間関係の破綻はすさまじいものだと思います。

そのようななかで、教師の尊厳はズタズタです。なおかつ教師たちは、子どもの一番身近に

います。子どもの危機的な状況を背負えば背負うほど、社会から孤立していくわけです。現在、東京都では、定年まで勤めている教師は4割もいません。学校に希望がもてないのです。だから教師の尊厳を守り、彼らの仕事を支援し、さらには質の高い教師が入ってくるシステムを早急につくらなければいけないと思っています。

市場原理主義の大きな問題は、欲望が拡散してしまうことです。そして、そこに参入すればするほど、自分がわからなくなってしまうという問題があります。自分がわからなくなればなるほど、またそこに欲望していくという悪循環です。ここに生じているのは人間不信、それから社会不信、政治不信です。

いま新しい管理システムとして、「数値目標」というかたちが支配しています。これは、明らかに新自由主義がつくり出した新しい能力主義と、競争主義の社会における数値による管理システムだと思います。例えば、学力テストにしても、子どもの学力を高めることが問題ではありません。それを測定することによって、市民も学校も行政もコントロールされるのです。

■ 市民性の教育

このような状況のなかで、教育の目的と理念が広く問われてきました。その表れが「市民性（シチズンシップ）の教育」です。市民とは、社会の主体ということです。

「市民性の教育」ということで、3年後に全国の学校に市民性の教育のガイドラインを提案したいと考えています。その柱が、「主権者の教育」「公共倫理の教育」「葛藤解決の教育」です。この3本柱で、小学校から高校に至るまでの教育プログラムを提示し、高校を卒業すれば、社会参加の基礎的な知識と政治参加のできる能力を育てていこうという計画です。

市民性の教育は、21世紀の学校カリキュラムの中核（市民的教養の教育）であり、民主主義の政治と倫理と、その行動の教育（信頼と協力と参加）です。特に、信頼の教育は重要だと思

います。社会のなかで一番大切なものは、社会契約による信頼です。ところが、不信の構造のうでで改革をやろうとするから失敗してしまうのです。学校改革のなかでいくつかのモデル校をつくってきた経験から言えば、不登校や学級崩壊などの問題を解決していく一番の鍵になるのは、信頼と協力です。私は、子どもたち、教師、親、専門家が参加し、共に学び合い、育ち合う「学びの共同体」づくりという社会的実験を学校単位で行っています。これが、私のデザインした学校づくりですが、信頼と協力を実現できれば、まだまだこの社会は捨てたものではありません。実際にそれに取り組んだ小学校と中学校の大半が、2年間で不登校も9割なくし、学力は、県下でもトップレベルになりました。非行はもちろんゼロで、誰ひとりうつむいていません。そういう学校が実現できています。

いままで、日本の学校は改革のデザインができていなかったのです。ヴィジョンと哲学がデザインされ、それが市町村の自治体によって支えられれば、決して学校改革も、協力し合う新しい市民社会も、実現不可能ではありません。そこに希望を託したいのです。

（文責：親鸞仏教センター）

佐藤 学（さとう まなぶ）東京大学大学院教育学研究科教授

1951年、広島県に生まれる。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。教育学博士。著書に『「学び」から逃走する子どもたち』（岩波ブックレット）、『教育改革をデザインする』（岩波書店）、『授業を変える 学校が変わる』（小学館）など多数。また、『アンジャリ』第6号（親鸞仏教センター）に「子どもへのまなざし—表象される現実と見失われる現実—」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」（文京区の「東京ガーデンパレス」で）

り。

おおよそ、今生においては、煩惱惡障を断ぜんこと、きわめてありがたきあいだ、真言・法華を行ずる淨侶、なおもて順次生のさとりをいのる。

いかにいわんや、戒行惠解ともになしといえども、弥陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土のきしにつきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月すみやかにあらわれて、尽十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんとときにこそ、さとりにてはそうらえ。

この身をもつてさとりをひらくとそうろうなるひとは、釈尊のごとく、種種の応化の身をも現じ、三十二相・八十随形好をも具足して、説法利益そうろうにや。これをこそ、今生にさとりをひらく本とはもうしそうらえ。

『和讃』にいわく「金剛堅固の信心のさだまるときをまちえてぞ 弥陀の心光摂護して ながく生死をへだてける」(善導讃)とはそうらえば、信心のさだまるときに、ひとたび摂護してすてたまわれば、六道に輪回すべからず。しかればながく生死をへだてそうろうぞかし。

かくのごとくしるを、さるとはいいまぎらかすべきや。あわれにそうろうをや。「浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならいうぞ」とこそ、故聖人のおおせにはそうらいしか。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

これこそ、まったく人間の能力や努力を必要としない普遍的な行であり、善人や悪人という相対的な意味づけや人間の小さな努力を救いの条件とはしない教えである。

だいたい、いのちのある間は、欲望や怒り、罪の意識を断ち切ることは、まったく困難であるから、真言や法華の行者ですら、次の生でさとりを開くことを祈るのである。

まして、私たちのように戒律や修行や知恵のないものが、この世で「さとり」を開くことなどないのである。しかし、阿弥陀の本願の船に乗って、迷いや罪で満ち満ちた苦海を渡り、浄土の岸に到着したならば、黒雲のような欲望や怒りの感情が晴れ、たちまちに真実が月明かりのように輝き、あらゆるところを照らす阿弥陀の光とひとつになって、あらゆる人びとを救うときにこそ、「さとり」とは表現するのである。

この身をもつたままでさとりをひらくと言ひとは、お釈迦様のように、さまざまの姿をとって現れ、三十二相・八十随形好という瑞相を具え、法を説き、人びとを救いとうとでもいうのだろうか。こういう基準を満たしてこそ、この世で「さとり」を開くと言ひうるのである。

親鸞聖人の『和讃』には、「金剛堅固の信心のさだまるときをまちえてぞ 弥陀の心光摂護して ながく生死をへだてける」(決して壊れることのない信心が定まる、そのとき、阿弥陀如来の光に摂め取られ、永遠に迷いのいのちを超えたのである。善導大師を讃嘆した和讃)とある。これは、信心が決定したとき、二度と捨てることのない阿弥陀の救いに摂め取られるならば、六道という迷いの生を繰り返すことはない。そうすれば、永遠に迷いの生活を超越することができるのである。

このように受け止めることを、「さとる」というのである。混乱してはならない。まったく哀れなことである。「浄土真宗の教えは、いま、阿弥陀の本願の教えを信じ、彼の土(次の瞬間)でさとりを開く」と、いまは亡き、師匠・親鸞は仰せられたのである。

語 註

①「三密行業の証果」衆生の三密(身・口・意)と大日如来の三密とが、真言密教の修行により相応して仏果を証すること。

②「四安樂の行」「法華経」に説かれる一、身安樂行 二、口安樂行 三、意安樂行 四、智願安樂行のこと。すなわち、衆生の身・口・意の三業についてのあやまちはなれることと、衆生を教化するための誓いをたてること。六根清浄は、この四行によって得ることができ、③「三十二相・八十随形好」仏陀(釈尊)の身体的特徴。外見上、身体に現れた三十二と、さらに詳細な八十の特徴。

(訳・語註・親鸞仏教センター)

私の二冊

(伊東恵深)

『仏教vs.倫理』

末本文美士(ちくま新書)

刺激的な書名に惹かれて、本書を手にとつてみたが、その主題は、宗教や倫理の本質に鋭く切り込み、両者の緊張関係を根本から問い直す試みである。著者は、日本仏教史研究の第一人者であるが、今日、倫理道徳では解決できなくなっている問題を、仏教を手がかりに説明していこうとする。

「倫理はあくまで世俗の(人間)のルールの問題だ。むしろ、僕たちはつねに(人間)のルールに回収できない問題に直面しなければならず」「(人間)の領域を超えたとき、(中略)もはや倫理は成り立たない。倫理に回収されない、超・倫理としての『宗教』の問題へと否応なく入り込んでいかなければならない」。

「倫理の枠から外れたとき、立ち現れるのが他者である」「宗教の根源は他者と関わり、さらには他者の中でもっとも他者たる性格の強い死者と関わり、そこにある。そこに拠点を築くことで、はじめて人は固定化した『人の間』の倫理を突き抜け、本当に生きる力を獲得することができる」。

このように、世俗倫理の限界を提示し、他者・死者との関係を再構築するあり方は、現代仏教の新たな可能性と方向性を指し示しているように思う。



『聖典』の試訳（現代語化）

第十五条は、信仰の目覚めを「過去形」で受け取るこの間違いを批判していく。

親鸞の信仰は、「いま」の救済である。決して過去形で受けとめられない。もし、過去形で「救われた」とか「さとった」と語れば間違いになる。しかし、「未だ救われていない」と語っても間違いだろう。「あの世」にいつてからさとするということになると、理想主義の信仰に墮す。さらに「現在、救われつつある」と語って現在を措定するならば、それも間違いであろう。悲しいかな、人間には純粹な「現在」はないからだ。あるのは「過去」だけである。人間が「わかった」とか「感じた」といえる時間は、すぐに「過去」の領域に入ってしまう。純粹な「いま」を知っているのは如来だけである。この「いま」に打ちのめされるところにしか親鸞の信仰は成り立たない。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第十五条〉

原文

煩惱具足の身をもつて、すでにさとりをひらくということ。

この条、もつてのほかのことにそうろう。即身成仏は眞言秘教の本意、三密行業の証果なり。六根清浄はまた法華一乗の所説、四安樂の行の感徳なり。

これみな難行上根のつとめ、観念成就のさとりなり。

来生の開覚は他力浄土の宗旨、信心決定の道なるがゆえなり。

これまた易行下根のつとめ、不簡善惡の法な

現代語訳

「信心を得たならば、あらゆる煩惱を備えた身のままで、さとりを開くことができる」と主張することについて。

この主張は、もつてのほかのことである。即身成仏（この身のままで仏に成ること）という教えは眞言密教の根本義であり、三密行業の証果（身心で大日如来を觀じて得た悟り）である。六根清浄（人間の身心が清らかになった状態）という教えは、法華一乗（天台宗の教義のこと・「法華経」に依る大乘の教え）の説くところであり、四安樂の行（自己の身心と他のひとを安らかにするための修行）によって得られる功徳である。

これらはみな、特に秀でた能力によつて行することのできる難しい修行であり、精神統一して仏、菩薩をイメージすることにより成就するさとりである。

それに対して、人間の時間意識を破つて未来から開かれてくるさとりは、絶対他力を根本義とした浄土真宗の教えである。すなわち、いま、ここで本願力の信心に身も心も定まる道だからである。

親鸞仏教センターの動き

（2006・6～8）抄出

■2006年

- 6・1 情報誌「Fatahi」第11号、研究誌「現代と親鸞」第10号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第18号を発行。
- 6・2 第195回研究会議（研究・交流・出版）第69回「歎異抄」研究会
- 6・9 親鸞聖人ご命日のつどい第12回英訳「教行信証」グロッサリ研究会
- 6・16 第48回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 6・20 第5回英訳「教行信証」再版編集会議
- 6・23 第3回テーマ別研究交流会「孤独の身をどう生きるか」内科専門医、聖路加国際病院附属クリニック・予防医療センター長・平松園枝氏、小池・高城総合法律事務所所長・弁護士・高城俊郎氏（千代田区・東京国際フォーラム）
- 6・27 第45回清沢満之研究会
- 7・1 人事発令（前田専学客員研究員、天野眞知子嘱託、津津功非常勤嘱託が再任）
- 7・4 第76回英訳「教行信証」研究会
- 7・7 親鸞聖人ご命日のつどい
- 7・28 第49回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 8・1 人事発令（本多雅人、越部良一、常塚聡、春近敬が嘱託研究員として再任。新たに、山本伸裕、法隆誠幸が嘱託研究員として発令）
- 8・4 親鸞聖人ご命日のつどい
- 8・29 第50回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 9・1 「親鸞仏教センター通信」第19号を発行。

テーマ別研究交流会報告①

人間（個・孤独）の精神の開け
とはどういうことか

親鸞仏教センター研究員 高 海 史

2005年度から、親鸞仏教センターでは、新たに「テーマ別研究交流会」を開催している。まず初年度は、サイコシンセシス（psychosynthesis 統合心理学）の日本における第一人者であり、内科専門医である平松園枝氏を講師にお招きし、東京国際フォーラム（千代田区有楽町）を会場にテーマ別研究交流会を開催した。

その第1回は、2005年12月16日「サイコシンセシスの人間観」、第2回は、2006年2月20日「自力と他力—意志について」、そして、最終回の第3回は、2006年6月23日「孤独の身をどう生きるか」を講題に開催した。また、前2回の研究交流会のオブザーバーに、弁護士の高城俊郎氏（小池・高城総合法律事務所所長）をお迎えした。

本号では、第1回、第2回の研究交流会から、その一部を紹介し、報告とする。

■「テーマ別研究交流会」発足の願い

ある専門（学問）領域に従事する者が、他の専門領域の研究者と対話・交流しようとする試みは、研究方法等の相異もあり、いろいろな困難に見舞われることがある。そうした困難をお互いに乗り越え、現代に生起するさまざまな問題点（人間関係の悩みから、実存レベルの問題点まで）について、共通に関心のもてる課題、人間を通底する課題を議論し合い、それぞれの研究活動に資するよう見識を高め合い、その対話内容を広く公開していくことが、本交流会の発足の願いである。そして、提出された課題や問題の継続した対話をとおして、さらに、宗門内外の学識者との共同研究事業の方途を開いていきたいと考えている。

■トランスパーソナル心理学との対話を願って

すでに、「現代と親鸞の研究会」では、西平直氏（東京大学大学院助教授）から「アイデンティティとスピリチュアリティ」というテーマ



平松 園枝（ひらまつ そのえ） 内科専門医、聖路加国際病院附属クリニック・予防医療センター長
1970年、京都大学医学部卒業。サイコシンセシス研究会代表。日本ホリスティック医学協会顧問。
著書に「好きな自分、嫌いな自分、本当の自分」（大和出版）、「イメージと音楽による：心の別荘Ⅰ—Ⅲ」（CD／ヒーリングバイブレーション社）、「意志のはたらき サイコシンセシス叢書Ⅰ」（誠信書房）ほか多数。

で講演いただいている（『現代と親鸞』第9号参照）。氏は、宗教的感性、情操、霊性とも重要な概念と思われるトランスパーソナルについて問題提起をされ、アイデンティティ、ライフサイクルといった考え方や仏教の人間観、生死観との対話の可能性を示唆された。

西平氏との対話が、主に理論的な面に重きを置いたこともあり、今回は、実践面を取り入れながらトランスパーソナル心理学との対話を試みよう、平松園枝氏をお招きすることとした。

■サイコシンセシスの人間観

サイコシンセシスは、フロイトの精神分析を学んだイタリアの精神科医ロベルト・アサジオリ（R. Assagioli）によって1910年に提唱されたもので、「愛、魂、意志を取り戻した心理学」「トランスパーソナル心理学の最初の枠組み」「宗教と科学の統合」などと言われる。トラン

スパーソナル心理学にもいろいろな流派・思想があるが、アメリカでは現在、概ね三つに分類される、と筆者はとらえている。

一つ目は、東西思想の融合というケン・ウィルバーの理論化の系譜、二つ目は、呼吸から変成意識を探る特殊体験といったスタニスラフ・グロフの系譜、そして三つ目がサイコシンセシスの流れで、トランスパーソナル思想を専門家だけの領域に留めず、気づきを現実の改善に結びつけていく系譜である。

フロイトから^{たもと}袂を分かって誕生した学問だけあって、その思想は、人間の無意識を含めた存在理解である。アサジオリは、その無意識を三層に分け、フロイトの語った衝動、本能などを下位無意識、思い出せる範囲の無意識を中位、そして人間の創造性、美、芸術、勇気、宗教性など、崇高な特性のある領域を上位無意識と呼んでいる。この上位無意識をトランスパーソナル領域とも言う。この無意識が、病的な下位無意識とは異なった性格をもつものであり、人間の生きる力を活気づけると見抜いた点が、アサジオリの功績の一つである。そして、その後のトランスパーソナル心理学の系譜に受け継がれている重要な部分であると言えよう。

アサジオリは、人間の本質・真の自己をトランスパーソナルセルフと呼び、その特性やエネルギーのある領域をトランスパーソナル領域ととらえた。一方、現実の意識の中心をその投影であるパーソナルセルフと呼び、これを現実の主体として、誰でも体験的に実感し強化できるようにした。そして、このパーソナルセルフがトランスパーソナル領域に触れて、それを現実にかくに表現していくかということに、意志の働きを重視した。それぞれが無意識に気づき、現実^{じゆんじ}に意志を共有し合うことにより現実を改善できると考えた。

また、その主体が「どう生きるのか」という過程は、サイコシンセシスの理論の核となっていて、この過程において、「気づき」に基づい

た「真の意志」が人を動かす大切な内的な力である、とアサジオリは主張している。こうした用語を駆使して、人間を動的にとらえている点も、アサジオリ思想の特徴の一つと言えよう。

■ 最終回（第3回）を迎えて

これまでの2回の講義を受け、いただいた問題を筆者の言葉としてまとめてみるならば、サイコシンセシスからは「自己を内観・内省し、真理に触れたうえで個を確立する」という人間観を教わった。この人間の精神の一連の展開は、真宗の教え（例えば、「二種深信^{じんしん}」）と似ているように思われる。もっとも異なる点も当然ながらある。特に大きな異なりは、「個の確立」という人間理解である。真宗や仏教では、「個の確立」を肯定的に認識していないといってもいいのではないか。こうした根本的な相違をどのように受け止め、さらには違いを真摯に受け止めながら、どのような対話を行うことができるのか。

第3回の研究交流会では、希薄な人間関係が、私たちの生活のなかで大きな比重を占めることにより生じる「孤独」「寂しさ」という日常場面の感情から、真宗、サイコシンセシスでは現代人の孤独をどのように見るのか、閉鎖的な心はいかに開かれるのか、私たちは孤独をどう引き受けて生きるのかなどについて、それぞれの立場から意見が交された。

※平松園枝氏との研究交流会の詳細は、『現代と親鸞』に掲載予定です。



平松園枝氏を迎えての研究交流会（東京国際フォーラムで）

● 英訳『教行信証』研究会報告 ④ ●

浄土はなぜ 「莊嚴」されているのか

親鸞仏教センター研究員 羽 塚 高 照



英訳『教行信証』研究会は、現在、月例の輪読会において「行巻」の読解を進めている。今号では、研究会で浮かび上がってきた鈴木大拙訳の特徴の一端を、筆者の所感も交え報告する。

また、2006年3月28日には、龍谷大学教授のデニス・ヒロタ先生をお迎えし、「鈴木大拙訳『教行信証文類』にみられる親鸞思想の理解」をテーマに講義をいただいた。その詳細については、『現代と親鸞』第12号に掲載予定である。

＊『教行信証』の引用は、『真宗聖典』（東本願寺出版部）、大拙訳の引用は、*The Kyōgyōshinshō: The Collection of Passages Expounding the True Teaching, Living, Faith, and Realizing of the Pure Land*. (1973) による。大拙訳からの羽塚による試訳をくゝで示す。なお〔 〕内は羽塚による補足である。



われわれ日本人が、日本語で書かれたテキストの翻訳から何を学ぶのか。単に、『教行信証』の解釈を大拙に肩代わりしてもらうだけにとどまるべきではないであろう。大拙の翻訳には、彼自身の了解を通した鋭い洞察が含まれている。それをわれわれは問題提起として受け止め、『教行信証』の理解を問い返していくべきである。そこで本報告では、「莊嚴」という言葉を大拙がいかに理解し、英訳したかという点を糸口として、浄土の意味を問い返してみたい。



漢訳語「莊嚴」のサンスクリット原語は、*vyūha*、あるいは *alamkāra* である。前者は「動かす」「押す」を意味する動詞 *√ah* に、分離を意味する接頭辞 *vi* がついた *vy-√ah* からの派生名詞であり、「分配」「配列」を原意とする。後者は、副詞「十分に *alam*」と動詞「な

す *√kr*」との合成語から派生した、「準備」「裝飾」を原意とする名詞である。仏教において「莊嚴」とは一般的に、仏国土や仏の説法處を美しく飾ること、また智慧や徳で菩薩が自身を飾ることも意味する。

ただし、浄土の「莊嚴」とは、単に物質的な対象を表すことをその目的とするのではない。この有限で相対的な世界（娑婆）に生き、感覚の対象世界にとらわれている私たちにも認識できるように、仏は具体的な形をとって現れ、浄土は物質的な描写でもって描かれるのである。大拙は、“A Preface to the *Kyōgyōshinshō* (unfinished),” *The Eastern Buddhist* (New Series), 6-1, 1973 において、阿弥陀によって建てられた浄土の絶対性と経典に見られる物質的な描写との「矛盾」について、次のように述べている。

「インド人の想像力は、全力でその〔浄土の〕壮麗さと美しさを描写した。（中略）しかし、浄土は、すべての衆生に対する『大悲』によって動機づけられた、菩薩の願心としての行いによって産み出された功德である、と教えることを〔経典の〕作者は決して忘れなかった。

（中略）その浄土の存在を、感覚的認識に縛られた人間 mortal に覚らせることは究極的に困難である。インドの天才は、あえて物質的に浄土を描いたのである。（中略）浄土におけるあらゆるものは、浄土の一般的な概念を象徴化する symbolize、あるいは特殊化する particularize ためにつくられ、配列されているのである。浄土とは、無限の無碍の光それ自身であり、人間の意識のプリズムを通して映し出された後では、無限の多様性をもった莊嚴 *vyūha* へと分光する。」(pp. 19-21)

もちろん、大拙も「莊嚴」に対して、その原意に基づく、embellishment (p. 56) や adornment (p. 69) などの〈装飾〉を意味する言葉や、dignity (p. 48 etc.) 〈尊嚴〉、あるいは“constituent parts” (p. 177 f.) 〈構成部分〉などの訳語を充てることもある。しかし、大拙による「莊嚴」の訳語の多くは、阿弥陀の本願のあらわれとしての意味を前面に押し出した表現がなされている。以下、そのうちのいくつかを例示する。

- ・釈迦牟尼仏（中略）無量寿仏の莊嚴功德を説きたまう。（p. 168、「行巻」・『論註』からの引文）

Śākyamuni Buddha ... told his audiences about the particular merits characteristic of the Buddha of Eternal Life. (p. 29) 〈釈迦牟尼仏が、（中略）「永遠の命」という名の仏のみが持つ特別な功德について聴衆に語られた。〉

- ・「^{ひつきよう}畢竟」に二種あり。一つには莊嚴畢竟、二つには^{くきよう}究竟畢竟なり。（p. 197、「行巻」・『涅槃経』）

[T]here are two kinds of finality: medial and ultimate, (p. 68) 〈媒介と究極という二種の畢竟がある。〉

- ・釈迦、極楽の種種の莊嚴を讃嘆したまう。（p. 217、「信巻」・『観経義』）

Śākyamuni praises and is delighted with all the inspiring effects of things in the Pure Land. (pp. 95-96) 〈釈迦牟尼は、浄土における事柄のうち、あらゆる^{ききよう}力づけるはたらきを賞賛し、喜ぶ。〉

- ・種種の功德具足して、威徳廣大清浄仏土を莊嚴せり。（p. 226、「信巻」・『無量寿如来会』）
All kinds of meritorious deeds were performed, and the Buddha-land of awe-inspiring dignity and virtue was fully materialized. (p. 106) 〈[法処比丘により]すべての賞賛に値する行いが成し遂げられ、畏敬の念を生じさせる尊嚴と功德としての仏土が、完全に具体化された。〉
- ・また向に^{きき}観察莊嚴仏土功德成就・莊嚴仏功德成就・莊嚴菩薩功德成就を説きつ。この三種

の成就是、願心の莊嚴したまえるなり。（p. 233、「信巻」・『論註』）

Reference has already been made to inspecting the completion of merit as regards the three forms of actualization: the Buddha-land, the Buddha, and the bodhisattvas. They come from 「Amida」 Buddha's mind that prays [to save all beings]. (p. 116) 〈仏土、仏、菩薩という、三種の具現化に関しては、功德の完成の詳述についての言及はすでになされている。それら〔三種の具現化〕は、[すべての衆生を救おうと]祈る[阿弥陀] 仏の心に由来する。〉

- ・かれ十方一切の世界に、三宝ましまさぬ処において、仏法僧宝功德大海を住持し莊嚴して、遍く示して、如実の修行を^{もと}解らしむ。（p. 289、「証巻」・『論註』）

The bodhisattva presides over, maintains, and actualizes the great ocean of merit belonging to the Buddha, Dharma, and Saṃgha in all the worlds in the ten quarters where there is as yet no Triple Treasure. He thereby universally leads the people to understand the real practice of the Buddha-dharma. (p. 188) 〈菩薩は、十方のすべての世界においてまだ三宝のないところで、仏・法・僧伽に本来ある功德の大海をおさめ、護持し、具現化する。それによって、菩薩は、人々を仏法の真実なる実践が理解できるよう導くのである。〉



浄土はなぜ「莊嚴」されているのか。「莊嚴」とは何か。いま大拙の訳語を用いて、この問いに答えようとするならば、次のように言うことができるであろう。すなわち「莊嚴」とは、浄土の絶対性を直接認識することのできない私たちのために、それを〈具体化〉・〈具現化〉し、私たちを〈力づけるはたらき〉を有し、私たちと浄土との〈媒介〉となるものである。「莊嚴」とは、すべての衆生を救おうとする本願から湧き起こる、阿弥陀仏の〈特別な功德〉なのである。

第 4 回「親鸞仏教センターのつどい」を開催（4 月 26 日）

親鸞仏教センターでは、去る 4 月 26 日、親鸞聖人の教えによって開かれる人間関係のつながりを求め、第 4 回「親鸞仏教センターのつどい」を開催した。午後 1 時からセンターの仏間において「おつとめ」を行い、その後、会場を「学士会分館」（文京区・東大赤門隣）に移し、講演と交流懇談会の「つどい」をもった。「つどい」には、大学教授、医学、法曹関係者、ジャーナリスト、宗教者、作家など各界の有識者約 60 名が出席し、帯津三敬病院名誉院長の帯津良一氏（写真上）と本多弘之所長が講演した。

帯津氏の「エビデンスと直感—いのちの時代を生きる—」と題する講演では、近代医学を支えるエビデンス（科学的根拠）が、人間を一つの部品として対象化し、誰もが証明できる事実に向かっていることに対する医療者の苦悩や近代医学に関する矛盾などを挙げられた。そのうえで、「人間は、病というステージに留まらない。生老病死すべてが存在する。人間そのものがどう悩んでいるのか、一人ひとりが生きている全体丸ごとを見なければならぬ」と、ホリスティック医学の意義を語られた。続いて本多所長は、「自覚と事実」と題する講演で、「仏教も事実を無視するわけではない。人間は事実そのものを生きていながら、事実を解釈し、了解していくことのなかで、生きていることを苦悩と感じたり、ストレスを感じてしまう。そういう自我の意識に執られたあり方を、いかにして翻すのか」というところに教えの言葉がある。だからそこに、意識の転換という意味での自覚という契機があるのではないかと述べた。

引き続きの交流懇談会では、里雄康意（真宗大谷派参務）の挨拶の後、斎藤勝治氏（株式会社放送衛星システム参入）から祝杯（写真下）の言葉をいただいた。また、田中ケネス氏（武蔵野大学教授）、和田町子氏（聖心会修道女）、大須賀敏明氏（千葉大学助教授）、守谷希実枝氏（特定非営利活動法人国境なき子どもたち専務理事）、関根瑛應氏（日本仏教徒懇話会代表世話人）、青木新門氏（作家）、鈴木洋子氏（弁護士）、井上憲司氏（読売新聞社編集局専任部長）、草野顕之氏（大谷大学文学部長）から、それぞれ専門分野での苦闘にふれながら、センター活動に対する激励の言葉をいただいた。

※講演録は、『現代と親鸞』第 12 号（2007 年 6 月 1 日号・1 冊 1,200 円）に掲載の予定です。



●新スタッフの紹介

山本 伸 裕

1969 年山口県生まれ。明治大学政治経済学部（政治学）卒業、東洋大学大学院文学研究科修士課程（仏教学）単位取得退学、東京大学文学部思想文化学科（倫理学）卒業。

法 隆 誠 幸

1973 年山形県生まれ。大東文化大学経済学部（経済学）卒業、大谷大学大学院文学研究科修士課程（真宗学）修了。

武田定光元囑託研究員が

『歎異抄の深淵—師訓篇』を出版

本紙（6～7 頁）、『歎異抄』研究会の主宰者であった武田定光氏（当センター元囑託研究員）が、『新しい親鸞』（本紙第 16 号で紹介）に続き、このたび『歎異抄の深淵—師訓篇』を出版しました。本書の「はじめに」で、氏は「『歎異抄』の底を流れている基調音は何なのだろうか？ 時代を超えて響きつづけているたましいの叫びは何なのだろうか？ その音に耳を傾けていきたい」と述べています。

お求めは、雲母(きらら)書房(TEL03-5331-3343)まで。



親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

— 今との出会い —



携帯電話のバーコード

対応機種で簡単アクセス!

あ と が き

世界的な仏教者であり、大谷大学名誉教授であった鈴木大拙先生の想い出を、『aṇjali』第 10 号にご執筆いただいた京都大学名誉教授の上田閑照氏は、『鈴木大拙とは誰か』（岩波現代文庫）のなかで、「人間の真実を語って世界に新しい息吹を吹き込みつつ世界の只なかで働きに働いた大拙は、1966 年 7 月 12 日、突然の腸閉塞のために 96 歳の生涯を終えた。臨終も間近、看護にかかりきっていた岡村美穂子さんが、「Would you like something?」と尋ねたのに対して、「No, nothing, thank you.」がこの世での最後の言葉であった。（中略）最晩年のあるとき、ある人が『鈴木先生は死んでからどうなるのか知りたいと思われたことはございませんか』と尋ねると、大拙はひとりごとのように、「それよりも、今、ここに在ることはどうなのかいな……。死んでからでは、遅くはないか」と答えたという。

働きに働き、いつでも、どこでも、今・此处という仕方て生を尽くして大拙は、「No, nothing, thank you.」となってこの世を去った」（要旨）と述べている▼本紙前号（第 18 号）に既報のとおり、鈴木先生が還浄されて 40 年の星霜を数える今年、真宗大谷派も主催者として参画する「鈴木大拙没後四十年記念展」が、先生ゆかりの地である全国 3 会場において順次、開催されている。鎌倉市（鎌倉国宝館）でのオープニングセレモニー（6 月 7 日）をかわきりに、金沢市（金沢市立ふるさと偉人館：8 月 3 日～9 月 30 日）、京都市（大谷大学博物館：10 月 10 日～11 月 28 日）で巡回展示される。講演会や著書、原稿や墨蹟、写真や遺品等とおして、禅、念仏の教えを实践され、仏教の思想・文化の普及にご尽瘁された鈴木先生の 96 年のご生涯に、ぜひふれていただきたいと思う。私たちにとっては、先生の晩年の、英訳「教行信証」の手書き草稿を目の当たりに拝観できることも感銘深い。記念展「図録」（1500 円、送料別途必要）の購入は、大谷大学博物館（TEL075-411-8483、FAX075-411-8146）まで。（長谷岡）